【最優秀賞】

【本当の水のありがたさ】

名古屋市立神沢中学校 三年 佐藤 心春

ゼネコンに勤めていた祖父は、大学で土木工学を学び、長年ダム建設に携わってきた。そして定年退職をした今でも、画面表示の大きいシニアスマホで自分が関わったダムの水源情報をチェックしている。

私は小さな頃から、野球をやっている兄に両親が帯同していたため週末は近くに住む祖父母の家に預けられることがあった。だから祖父とは色んなダム巡りをした。なかでも一番印象に残っているのは黒部ダムだ。まず大きさに圧倒された。そして、観光のための放水を一度見たのだが、毎秒十トン以上の大量放水と、かかった鮮やかな虹が圧巻の景色だった。小さい頃は「景色」であったダムだが、小学二年生の頃、いつものように祖父と家の近くを流れる愛知用水沿いを散歩していたとき、この愛知用水がなぜつくられたのかと、ダムの本来の役割を知ることとなった。昔、愛知県にある知多半島には大きな河川がなく、田畑で使う水を川から取ることができずさらに日照りが続き、深刻な水不足となっていた。そして一九四七年の大干ばつをきっかけに、地元の人達が動き出し、一九六一年、長野県に牧尾ダムが完成した。このダムは愛知用水の水源となっており、今でも農業や水道水として、また製造業が盛んなこの地域の工業用水として使用され、地球に優しい水力発電も行っている。この愛知用水のおかげで地域が発達し、生活が便利になったことはとても嬉しいことである。

私は今当たり前のように蛇口をひねり安心安全な水を何不自由なく使っているが、今回この作文を書くことで、改めて水の大切さを知るきっかけとなった。世界では二十二億人が安全に管理された水を利用することができず、さらにこのうちの一億人以上が湖や河川、用水路など処理がされていない地表水を使用しているということ、そして十八億人が自宅の敷地内で水を手に入れることができないことがユニセフの資料で分かった。SDGsの目標六には、「安全な水とトイレを世界中に」とある

が、水は限りある資源なのだ痛感した。では今、私にできることは何か。まずはこうした状況を知り、水の使い方を考え関心を持つこと、そして安全な水を当たり前に使っていることに感謝をし、できる限り節水をすることだと私は考える。手を洗う、歯を磨く、お風呂に入る、日常生活で今すぐ始められる。思い返せば、祖父は昔から顔を洗う際に石けんは使用していなかった事と、お風呂場で自分の使ったタオルを、残り湯で手洗いしていた事を思い出した。祖父と同じ会社で知り合った祖母から、結婚当初から祖父は携わっているダムが完成するまで家にほとんど帰ってこなかったこと、そして娘三人には、その時祖父が携わっていたダムにちなんだ一文字が入っているということを知ったことがある。私の中で多くの点と点がつながった。安全な水の背景には、多くの人達の努力と強い思いがある。本当の意味での水の大切さを知っている祖父から、水のありがたさを教えてもらえた気がした。その気持ちになったことで、いつもの蛇口から出てきた水は格別おいしく感じた。そして世界中の人にこのおいしい水が当たり前に届くような日が、一日でも早く来るよう、私も今日から出来ることを始めようと思う。